

## 松下国際財団 研究助成 研究報告

【氏名】 畑 あゆみ

【所属】(助成決定時)名古屋大学大学院文学研究科

【研究題目】ニュース・記録映画における音声の実践と変容—1960—70年代左翼運動の表象を中心に

### 【研究の目的】

本研究は、反体制運動が活発化した1960—70年代において、運動の渦中にあった映像作家らによる記録映像と音声の効果をめぐる実験が、激変する戦後日本の政治・社会・文化的な文脈とどのように関わり、展開していったのかという問いに取り組んだ。とりわけ記録映画作家小川紳介の作品では、被写体の「声」と映像との構成・処理において実験的な試みが行われていたが、それは同時代の映画界においてどの程度実験的であり、他の記録映画、劇映画や、同時代の寵児であったテレビの記録・ニュース映像とどのような差異・共通点を持っていたのか。またそれらが、高度経済成長とメディア文化の急速な発達の中で、メディアによって「他者化」された「活動家」表象といかなる差異・共通点を持っていたか。これらの観点から小川プロ作品を詳細に分析し、映画史だけでなくより広い社会的視野から彼らの仕事の歴史的意義を問い直すこと、そして彼らの作品の分析を通して、映画経験を持つ固有の力、その知覚経験を支える音声の重要性へと光を当てることを本論の目的とした。

### 【研究の内容・方法】

以下に示す三つの観点を、映像作品のテキスト分析、同時代の社会・文化思潮を読み取るための文字資料を中心とした言説調査、そしてそれら双方の分析結果を総合的に検討する三つの段階を通じて分析する。

(1)1960年の安保闘争から78年の成田空港開港にいたるまでを一つの区切りと考え、その間の学生、農民団体などによる左翼運動の盛り上がり、テレビ、新聞などのマスメディア、記録映画、そして他の劇映画などを中心に、どのように表象されていたのかを問う。具体的には、小川プロ他独立プロダクションの記録映画と、他のいわゆる「マスコミ」報道、例えば新聞、テレビなどで見られた運動そのものの表象を比較検討する。(2)本研究が焦点を当てる小川プロダクションの作品が、当時の映画・社会批評言説の中で、どのように受け止められたかを検討する。新聞、左翼闘争に関する書籍、『朝日ジャーナル』などの一般雑誌から、『映画評論』などの映画雑誌、大学新聞など、作品をめぐる様々な言説を分析し、小川プロの作品と上映活動に対する同時代の評価がどのようなものであったのかを検討する。(3)60—70年代において急速に発達した「マスコミ文化」と、同時期に徐々に台頭しつつあった「若者文化」における「言葉」の位相を探る。学生、農民活動家らによる「左翼的」な言説、街頭演説は、当時の急速に大衆化していくマスメディアにおいて、どのような位置を占めていたのか。また彼ら自身の個々の「主体」と、彼らが共有していた「左翼言語」とはどのような関係にあり、同時にテレビやラジオだけでなく、他の彼らの日常生活にあふれる言語文化において流通していた同時代の「言葉」とどのような関係にあったのか。この点を、1、2の研究成果を踏まえ、当時の視聴者参加型のラジオ・テレビ討論番組、週刊誌、小説などと比較検討し探っていく。

### 【結論・考察】

本研究の主たる分析対象として1967年製作の『圧殺の森』という学生運動を記録した作品を取り上げた。この作品を称賛する当時の批評では、撮影対象である学生活動家の「内なる生」のリアリティが強く感じられるという評価が中心であった。それはテキスト上では、極端な近接ショットと、過渡期にあった疑似シンクロという手法で記録された、映像と音声の組み合わせの効果によるものであった。加えて、こうした新しいリアリズム探求の試みを理解する上で重要な文化社会状況として、日本における68年前後の活動家学生をめぐる状況と、マスメディアにおけるリアリズムの変容の二点を分析した。60年代末という時代はイメージ消費が急速に日常化していくプロセスのただ中にあり、人々の関心とテレビを中心とする映像文化におけるリアリズム表象が、より個別的で私的な領域へと向かう転換点でもあった。同時に、それまで若者たちを引き付けていた、政治的な「言葉」の変革の力への期待が失われていく時代でもあった。『圧殺の森』は、同時代の大衆の「人間観察」への欲望に基づいた新たなリアリズム表象を取り込みながら、言葉と内面が齟齬をきたす学生たちの不確かな生を生き生きとテキストに映しこみ、同時にその先の状況をも指し示す批評力を持った作品であったと言える。